

梁啓超の日本観 新語彙と新文体を中心に

盧 守 助

要 旨

甲午戦争以後、中日両国の関係比历史上任何时期都显得密切和重要。当时、随着两国地位的显著变化、中国人对日本的认识也发生了变化。梁启超是当时中国知识分子的代表人物之一、他的对日观折射出当时中国人对日本认识的实情。本论以流亡日本时期的梁启超的为研究对象、通过他对当时产生于日本的新词汇和新文体的吸收和认识、探讨他的对日观并得出以下结论。明治期的日本文化对梁启超的思想的形成和发展产生了重大影响、但是根深蒂固的华夷观成为他深入了解日本文化的障碍。在很多情况下、他仅仅把日本视为通向西方的桥梁、而忽视了日本文化所特有的性质。

キーワード……和文漢読法 新語彙 新文体

はじめに

1899年12月19日日本亡命から1年2ヶ月あまりののち、梁啓超はハワイ旅行をしている。「夏威夷遊記」で、彼は日本での一年來の生活体験を大まかに記している。彼は日本を第二の故郷と称したが、その理由について次のように述べる。「故郷は必ずしも生まれ育った地ではない。なぜ生まれ育った地が故郷と称されるのか。それは自分自身と密接な関係にあり、さまざまな慣習が頭に刻みこまれており、忘れられないからである。したがって、およそ自分自身と密接に関係し、さまざまな慣習が頭に刻み込まれており、忘れられない地はすべて故郷と見なすことができる。(中略 引用者)また日本に居住して以来、広く日本書を搜して読んでおり、山陰地方の道を行くように、応接の暇なく、頭がそのために変わり、思想言論は、まるで別人のようになったのである。毎日、日本の新聞を読み、日本の政界、学界について相習い相忘れ、ほとんど己の国のごとし。蓋し私は日本と真に密接な関係があり、さまざまな慣習も頭に刻み込まれ、忘れられないものがある」と¹⁾。

概括して言えば、梁啓超はおもに文化の面から日本を第二の故郷と見なした。事実、明治期の文化は梁啓超の思想形成に大きな役割を果たしている。彼の生涯中最も重要な思想は、ほとんどこの時期において形成されたといえる。明治期における文化について、梁啓超は次のように述べている。「日本は維新から三十年来、広く世界中に知識を求めており、訳された有用な書

籍は少なくとも数千種類になる。とりわけ政治学、経済学、哲学、社会学などに関する書籍が豊富で、いずれも大衆を啓蒙し、国の基礎を強化する当面の急務に関するものである²⁾。また彼は幾度も日本書を読み、思想はそのために一変したと繰り返して評し述べている³⁾。明治期の文化巨匠、たとえば福沢諭吉、浮田和民、中江兆民、中村正直、加藤弘之、徳富蘇峰等の著作、高田早苗、吾妻兵治等が翻訳した西洋の著作は、すべて彼の思想の源となった。明治期の文化は梁啓超の近代的思想形成の土壌となったと言える。本論では、梁啓超の明治期の新語彙、新文体との関係を中心に、日本文化に対する認識を検討する。

1 文明の衝突と文化の変貌

周知のように、中国は西洋列強の武力によってやむをえず門戸を開放した。中国では、西洋の覇権は政治、軍事、経済だけでなく文化にも及んだ。西洋列強に陵辱された中国人は、西洋の帝国主義に対して痛恨の思いを抱く一方で、帝国主義と源を同じくする西洋の学術は中国が生きのびるために不可欠の要素の一つであると痛切に感じていた。それゆえ、西洋の著作を翻訳することは中国知識人の中の先覚者の共通の声であった。西洋の書籍を取り入れるにともなう、新しい語彙も次第に取り入れられた。それらの新しい語彙の一部分は直接に西洋言葉から翻訳されたものであったが、多くは日本語の訳語を借りたものである。それらの新しい語彙と用法は、中国旧来の言語の構造を変えるとともに、中国人の世界観と価値観を変えた。同時に、中国旧来の文体も次第に変化したのである。「文言文」(文語文)から「白話文」(口語文)に変わったのである。「白話文」が本格的に普及するのは1917年の文学革命後のことであったが、文体の変化はかなり長い時期にわたった。19世紀末から20世紀初頭に、黄遵憲、劉師培等は「白話文」を試みた。こうした文体は、『清議報』と『新民叢報』に掲載された梁啓超の文章が代表的なものであるが、これは「新民体」と称された。「清代學術概論」(1920年10月)で、梁啓超は当時の自己の文章を次のように評価している。「梁啓超は、以前から桐城派の古文を好まず、幼年時代、文章をつくるには、漢末、魏、晋のものを学んで、すこぶる技巧をたっとなだ。しかしこのときになってみずから解放されて、つとめて平易闊達なる文章をかき、ときには俗語や韻語、さらに外国語をもまじえ、自由に筆をふるって、およそ束縛されることがなかった。学生たちは争ってそれをまね、新文体と称した。老輩たちはこれをいたくなげき、野狐(野狐禪、すなわち邪道)と誹謗したが、しかしその文章は、論理明晰であり、筆鋒はつねに情感にあふれて、読者にとって、一種ふしぎな魅力をそなえていた」⁴⁾。中国新文化運動の旗手の一人であると称される胡適は梁啓超の文章について次のように評している。「梁啓超は最もよく各種の字句語調を運用して応用の文章を書いた。(中略 引用者)彼の文章は最も『古文の義法』に合わないものであった。だが彼の文章の魅力は却て最大であった。(中略 引用者)『新民叢報』を発刊すると影響はさらに大きく、二十年來の読書人で殆ど彼の文章の影響をう

けなかったものはない」と⁵⁾。梁啓超の「新文体」は新文体の性格を持つ「文言文」であったが、それはのちに中国に出現した新文化運動、あるいは文学革命の前触れであった。

2 「和文漢読法」

日本文化に対する梁啓超の認識を論じる際に、「和文漢読法」について検討する必要がある。梁啓超研究者の多くは梁啓超と明治期の日本文化の関係について、しばしば「和文漢読法」に言及する。たとえば、村尾進は、「(梁啓超)亡命後、和文漢読法によって大量の日本書を読み、ヨーロッパ風な『学理』に親しく接した梁啓超は、やがて、われは孔子を愛するが、それ以上に真理を愛する、というようになる」と述べている⁶⁾。また末岡宏は次のように述べている。「梁啓超は、特にその在日期间において『和文漢読法』を著したように、日本語の読み方を習得し日本の翻訳書を媒介として西洋の知識を摂取した」⁷⁾。また実藤恵秀もこれに言及して、「中国人が明治時代にはじめてに本文を訳したころの日本語は、名詞、動詞、形容詞、副詞など、ほとんどみな漢字でできていて、かながきといえ、動詞の語尾およびテニヲハぐらいなものであった、まさに漢字が主で『かなまじり』文であった。それゆえ、中国人が日本語を理解するには、テニヲハを理解すれば、語を顛倒して大意はわかるというほどであった。梁啓超が、『論学日本語之益』で、『日本語をまなぶのは1年ですむ。日本語をつくるのは半年ですむ。日本語を学ぶのは数日で小成し、数月で大成する』といったのは、そうしたいみからである。これを利用したものに『和文漢読法』というのがある。これは、速成日本語学習法である。すなわち、日本語には漢字が多い。わからないのはカナだけだということで、カナでかかれたテニヲハなどのいみをして、日本語を返り読みすることである。まずはじめに主語をとらえ、つぎに目を sentence の最後(。の前)にはせて、動詞をとらえ、さいごにあともどりして客語を読む」と論じている⁸⁾。以上のさまざまな見解は結論においてはほぼ一致している。すなわち彼らは梁啓超が「和文漢読法」の著者であるとし、それは日本語を学ぶ速成法であり、こうした方法によって、梁啓超は日本語に通暁したと考えている。しかし、梁啓超が「和文漢読法」の著者であるかどうか、またこの「和文漢読法」が本当に日本語の速習に効果があったのかどうかについて検証する必要がある。この点について論述する前に、まず「和文漢読法」の著者が誰であるか、またその性格について考察しておきたい。

(1) 誰が「和文漢読法」の著者か

いままで出版された各種の梁啓超の文集あるいは全集には、「和文漢読法」は収められていない。また李国俊が編纂した『梁啓超著作繫年』にも記録されていない⁹⁾。坂出祥伸は「梁啓超著述編年初稿(一)」で、「和文漢読法」は梁啓超と羅孝高(普)の共著とするが、「のち『夏威夷遊記』と改題」と記している。この点は明らかに誤記である¹⁰⁾。しかし、1900年11月、『清

議報』64号の広告欄に掲載された「和文漢読法告白」には、次のように記されている。「本書は日本語を学ぶ簡単、明快な方法を指示したものである。学ぶ人々はこれより、数日のうちに、日本書を読むことが可能になる。日本に滞在中の中国人はその益を十分に知っているため特に刊行する」と¹¹⁾。これによって「和文漢読法」はほぼ1900年より前に書き終えられていたことが分かる。村尾進、末岡宏、実藤恵秀以外に山田敬三も「和文漢読法」の著者が梁啓超であると考えている。山田は「そのような雑誌の刊行を継続する上で、梁が相談相手として列挙している人名は、麦孺博、羅孝高、周伯勳、蔣百里の四名であって、なかでも梁啓超が自作の続編執筆を依頼できる人物ということになれば、それはかつて彼のために『佳人之奇遇』の漢訳に協力して実質的な翻訳者となり、また梁を助けて『和文漢読法』の作成に尽力した羅孝高をおいて他には考えられない」としている¹²⁾。こうした判断は当時の人の記録、及び梁啓超の自述を根拠としていると考えられる。例えば誰が「和文漢読法」の著者であるのかということについて、楊維新は梁啓超と日本人との交際について言及して、「(梁啓超は 引用者)東京に来たばかりの時、牛込馬場下町(原注 住所は未詳)に住んでいたそうであった。その時、大隈の側近の人々、例えば犬養毅、高田早苗、柏原文太郎(原注 この人は任公先生(梁啓超))と友情が厚く、その時交わりを結んだ)は(梁啓超 引用者)とたいへん親しく交際しており、彼のために熱心に日本語文法を講釈した(原注 「和文漢読法」は任公が著したものである)。その時のことを、私は自分の目で見たため、詳しく語れる」¹³⁾。この手紙で、楊維新は梁啓超が「和文漢読法」の著者であると指摘している。「論学日本文之益」(1899年4月)で、梁啓超自身も次のように述べている。「私は『和文漢読法』という本を編纂した」¹⁴⁾。また、『新民叢報』15号の問答欄で、梁啓超は詳しく「和文漢読法」を作った経緯を述べている。「私は日本に来たばかりの時、同窓羅君(羅普 引用者)に付いて日本語を学んだ。羅君は簡易な方法で私に教えてくれた。その後、相次ぎ日本にきた中国人は、私に日本語を学ぶ方法を問う。そのため私は『和文漢読法』を著し、彼らに教えた。これは己亥(1899年 引用者)夏、五、六月の間のことであった。その本はわずか一昼夜で完成されたため、いいかげんなどころが多く、その上、その時の私はまだ日本語の文法に通暁していなかったため、とりわけあやまりも少なくなかったと思う」¹⁵⁾。彼自身も「和文漢読法」の著者であると自認しているのである。

梁啓超が「和文漢読法」の著者であるとする研究者は、彼の外国語を学ぶ能力を過大評価しているように考えられる。たしかに梁啓超ははずば抜けてすぐれた天分に恵まれていたが、外国語を学ぶ能力が特別すぐれていたわけではない。1896年梁啓超は馬相伯に付いてラテン語を学んだことがあった。当時梁啓超は極めて自信を持っており、友人に送った手紙で次のように述べている。「私は近ごろラテン語を勉強しており、すでに十数日になる。馬眉叔(馬相伯)は自ら志願して毎日二時間私を教えている。一年後、私はラテン語の書籍を楽に読めることになるであろう。来年会った時、私がギリシャの七賢人の思想を演説するのをぜひ聞いてほしい」¹⁶⁾。結局、これは実現しなかった。また馮自由によれば、梁啓超は「英文漢読法」を執筆する計画

をもっていた。この点について馮自由は次のように述べている。「梁はホノルルに滞在中、かつて何恵珍に付いて数ヶ月間英語を学んだことがある。日本に戻った後、梁は完全に英語を学ぶ秘訣を得たので、特に初級英語の文法を学ぶ要領を十数項目にまとめ『英文漢読法』を著し、初心者に恵みを与えると明言した。彼はさらに、この本を読むならば数ヶ月のうちに、英語の書籍を翻訳することができる」と語った。(王)寵恵はこれを聞いて不思議に思った。(梁啓超と)面会した時、王はその本の中身と構造が何であるかを詳しく尋ねた。梁は大いに恥ずかしく思った。それ以降梁は『英文漢読法』については口をつぐんで触れようとしなかった¹⁷⁾。馮自由は単なるうわさを記録しただけかもしれないが、梁啓超の気性が正確に表われている。

前述したように、梁啓超は「その本はわずか一昼夜で完成された」と述べているが、常識的に考えると、これは不可能である。また梁啓超によれば、「(『和文漢読法』 引用者)は己亥(1899年 引用者)夏、五、六月の間に書きあがった」が、その時期は、彼の日本亡命後わずか半年であった。また、「和文漢読法」は105頁に達する。24時間のうちにこれを完成することは誰にもできないであろう¹⁸⁾。「和文漢読法」を著した経緯については、羅普の記述は信憑性が高いと考えられる¹⁹⁾。羅普は次のように記している。「己亥(1899年 引用者)春、康南海(康有為 引用者)先生がカナダに行った後、任公(梁啓超 引用者)は私を誘って勉強のため箱根へ行った。塔之沢環翠楼に住んだが、それは去年の冬かつて南海先生のお供をしてここに遊んだことがあったからである。(中略 引用者)その時、任公は日本書を読みたかったが、未だ仮名が分からなかった。私は中国語の文法にたんのうであり、日本語にも通曉していたため、両者を融合して日本語を勉強する近道を求めるようにと勧められた。それゆえ、任公と互いに研究し、若干の通用規則を設け、日本語の初心者に中国語文法で日本語を顛倒して読むことで、十中八九日本語の大意が理解できることを示した。そこで、『和文漢読法』を著し刊行した。完全ではないとはいえ、日本語を学ぶ人はこれを習得すれば、日本書をおおよそ読むことが可能で、その効果はすこぶる大きい²⁰⁾。羅普はいったい誰が「和文漢読法」の著者であるか言明していないが、彼の述べたことと事実から見れば、これは羅普の著書であると判断すべきである。山田敬三の判断と逆で、羅普が「梁を助けて『和文漢読法』の作成に尽力した」わけではなく、羅普が「和文漢読法」を書きあげた後、梁啓超がその中の中国語の部分を添削したとみるべきであろう。梁啓超の中国語の能力はずば抜けており、中国でも、その右に出る者がなかったからである。「和文漢読法」は全部で105頁あるが、文法に関するところは22頁しかない。それゆえ、この部分の中国語を添削するだけであれば、一昼夜でも可能である。

こうした事情は「和文漢読法」だけではない。柴四郎の政治小説『佳人之奇遇』も中国語に翻訳されて、『清議報』1号から第一回から第十六回(原著の第十六巻にあたる)まで連載されたが、無署名である。1936年に出版された『飲氷室合集』はこの訳著を収めており、梁啓超の訳としている。しかし、『佳人之奇遇』の翻訳について、梁啓超と共に亡命し、日本の大島艦に

乗った王照は次のように記している。「戊戌（1898年）八月、先生（梁啓超）は危険を免れ日本に向かった。日本の軍艦で先生は何も所持していなかったため、艦長は『佳人之奇遇』という本を渡し、気晴らしをさせた。先生は読みながら翻訳し、その後これを『清議報』に載せた。そのようにして翻訳することが、軍艦に乗る時から始まった」²¹⁾。こうした記録は伝説であると考えられている。『清議報』の創刊は梁啓超の日本亡命から、わずかに三ヶ月後のことであった。また、梁啓超の述べた「日本の東京に居ること一年、すこし日本文を読めるようになった」という文章から考えると²²⁾、その時点において、彼は日本書を翻訳することはできなかったと考えられる。馮自由は『佳人之奇遇』を「和文漢読法」と同様に、羅普の訳としている²³⁾。「和文漢読法」も、『佳人之奇遇』も、その著者あるいは訳者は羅普であり、梁啓超は単に添削を加え監修したにすぎないと考えられる。

(2) 「和文漢読法」の性格

多くの梁啓超研究者は「和文漢読法」に言及しているが、「和文漢読法」がどのような性格を持つ著作であるかを、これまでに検討した論文はない。狭間直樹はたんに、「名前からも想像できるように、これは漢文訓読法の裏返しの的に応用したものなのだが、この速成法はその簡便さがうけて大流行し、のちまで影響を残すことになる」と指摘しているが²⁴⁾。「和文漢読法」の性格と構造を明らかにしているわけではない。「和文漢読法」は全部で105頁あり、まえがき、目録、凡例は一切ない。全書は二部から構成されている。その一は、日本語の文法に関するものであり（約22頁、42節）、その二は、和漢異義詞対照表である（約83頁）。まず日本語の文法に関するものについて例をあげる。

A<第一節>凡学日本文之法、其最浅而最要之第一着、当知其文法与中国相颠倒。实字必在上、虚字必在下。如汉文「読書」、日文則云「書ヲ読ム」。漢文「遊日本」、日文則云「日本二遊フ」。其他句法、皆以此為例。(1頁)

B<第十二節>一句之中、而有数個動詞、或数個助動詞、数個副詞者。其排列仍同。如「好読書」、則云「書ヲ読ムコトヲ好ム」。「読」字、「好」字、皆動詞也。如「不可読書」、則云「書ヲ読ムベカラズ」。「不可」二字、皆助動詞也。「不可不読書」、則云「書ヲ読マザルベカラズ」。「不可不」三字、皆助動詞也。如「亦嘗読書」、則云「亦タ嘗テ書ヲ読メリ」。「亦嘗稍読書」、則云「亦タ嘗テ稍ヤ書ヲ読メリ」。「亦」字「嘗」字「稍」字、皆副詞也。(5頁)

C<第十四節>日本書中、凡名詞必写漢字、不用仮名。動詞、副詞、十之九用漢字。其有用仮名者不過十之一耳。若助動詞則十之九皆用仮名、其用漢字者殆少。又脈絡詞（如「之」字「而」字之類）及句末語助詞（如「也」字、「乎」字、「哉」字、「者」字之類）亦皆用仮名、不用漢字。但此種専用仮名不写漢字之字、在日本書籍中通行者不過数十個耳。(6頁)

D<第二十二節>日本文中最要緊之字也。其中「テ、ニ、ヲ、ハ、ノ」等字、尤為要中之要。日本文典所稱「天爾遠波」是也（天即テ、爾即ニ、遠即ヲ、波即ハ）。連続成文、皆頼此等字、不可不熟記之。（14頁）

以上の例から見るかぎり、「和文漢読法」の著者は日本語と中国語の相違点と日本語の特徴を簡単に説明している。その説明に際して、著者は「名詞」、「副詞」、「動詞」、「助動詞」、「形容詞」などの言語学の用語を使っている。それらは、のちに中国人が言語学を研究する際の用語となった。日本語文法を解釈する部分は42節に達しているが、おもに中国語と日本語の相違点について述べており、日本文法の専門書とはいえない。たとえば、「動詞」を説明する際に、著者は「自動詞」、「他動詞」の区別についてさえ言及していない。また、全体で42節のある編成は系統的ではなく、おおむね著者が日本語を独学で会得したことをまとめたものであるといえる。これは、当時中国人が日本に倣う熱意はあったとしても、基本的な日本語に対する研究がまだ初歩的な段階にあったという実情を示している。こうした42節の説明により、速成で日本語をマスターできるとするのは奇想天外なことであろう。

また、和漢異義詞対照表において、著者は基本的に中国語で日本語の語意を解釈している。その中の一部の日本語彙はのちに中国に伝えられ、中国における基本的な語彙となった。しかし、著者の解釈は、奇妙なものも多い。次に例をあげる。

主観的 = 内理応如是(25頁)	抽象的 = 虚度(56頁)
人格 = 民有自由権謂之人格、若奴隸、 無人格者也(26頁)	有機体 = 生物(62頁)
共和政体 = 民主(30頁)	概念 = 大概想念(64頁)
利潤 = 利息(31頁)	無機体 = 死物(69頁)
反動的 = 好事之反而壞也(36頁)	理想 = 就現在想(73頁)
団体 = 凡衆聚之称(38頁)	發明 = 創造之事(75頁)
国際法 = 交渉法(38頁)	目的 = 宗旨(76頁)
空想 = 豫想後來(41頁)	積極 = 哲学訳語、陽極也(78頁)
客観的 = 外形応如是(42頁)	絶对的 = 完全無比者（即全権）(83頁)
唯物論者 = 哲学中重形骸輕靈魂者(51 頁)	經濟 = 理財学、資生学(83頁)
抽象 = 哲学訳語、想其理由之義(56頁)	觀念 = 觀而想念(90頁)
	論理学 = 弁学(93頁)

これらの日本語彙は、1900年以前に梁啓超がすでに直接そのまま使用したものであった。それゆえ、もし梁啓超が「和文漢読法」の著者であるとすれば、これらの語彙を、このような解

釈では収めるはずはなかったと考えられる。また、解釈の文の流れから見ても、梁啓超のスタイルではないことは明らかである。これは梁啓超がこの著作の著者ではないことをしめすものであろう。これらの外国語訳文は、もし日本語の原文（現代中国語でもある）がなく、単に著者の解釈を読むだけであれば、現代中国人だけでなく、当時の中国人も理解できず、また恐らく著者本人も理解できないものである。以上あげた日本語語彙については、「和文漢読法」の著者は字面だけを見て、当て推量の解釈をした。つまり、当時の著者はこれらの日本語語彙を理解する能力を未だ備えていなかったと言える。次の例はさらにこれを証明する。

不経済 = 不能打算(23 頁)	故障 = 異議、妨碍(58 頁)
不人気 = 人心不服(24 頁)	横手 = 名詞(63 頁)
持参金 = 名詞(27 頁)	波立 = 心(66 頁)
土産 = 基礎(38 頁)	物狂 = 形容詞(72 頁)
図星 = 目的(38 頁)	甲斐 = 詮効(74 頁)
宛 = 每也(42 頁)	立売 = 形容詞(79 頁)
引込 = 退間居(47 頁)	若緑 = 松、若叶(86 頁)
挨拶 = 恭敬之意(56 頁)	裏手 = 形容詞(88 頁)

その中で、「持参金」、「横手」、「立売」、「裏手」などを「名詞」、「形容詞」と解釈したのは書き間違いであるかもしれないが、その他の語彙は正確な解釈ではないと考えられる。こうした事情は「和漢異義詞対照表」の中で至るところにある。また、中国語で解釈できない日本語彙を、著者は日本辞書の原文をそのまま写し取らざるを得なかった。しかも写し取る際に、しばしば書き間違いをしている。次に例をあげる。

単語	和文漢読法	言海
下地	物事ノ起ル基トナルモノ。醤油。22 頁	(一)物事ヲスルニ、預メ供ヘ設クルモノ。物事ヲ起ル基トナルモノ。(二)醤油ノ一名。(吸物ヲ作ル下地ノ義)。447 頁
胤変	母八同ジク父異ナルコト。25 頁	兄弟姉妹ノ内ニ、母八同ジクシテ、父ノ異ナルモノ。615 頁
入込	差別ナク入り雑ルコト。29 頁	差別ナク入り雑ルコト。90 頁
刹那	時ノ極メテ短キ称(仏教語)。31 頁	仏経ニ、時ノ極メテ短キノ称。555 頁
可呑可吞ム	八水ナド飲ム音声立テ、急ギ呑ム。37 頁	(カカハ呑ム音)声立テテ急ギ呑ム。172 頁
失墜	無用ノ入費。耗費。40 頁	空シク失フ費。無用ノ入費。耗費。452 頁
御部屋	貴人ノ妾ナドノ尊称。47 頁	貴人ノ妾ナドノ尊称ニ用イル語。150 頁
敷地	其所用ニ供フル一區地。58 頁	其所用ニ供フル一區ノ地。436 頁
早月闇	五月雨ノ降り頻ル頃ノ称。60 頁	五月雨ノ降り頻ル頃ノ称。405 頁
旦那	商人ノ顧客ヲ敬ビテ又賤人ヨリ貴人ヲ呼ブノ語或ハ其対代名ノ如クモ用イル	(梵語、陀那鉢底ノ略転。布施、又ハ、施主ノ義)(一)僧ヨリ、其道ニ恵ミヲ

	顧主花主家人婢僕ヨリ其主君主人ヲ恩義アルニ就キテ称スル語。主君。62頁	与フル信者ヲ称スル語。檀越。(二)檀家、檀中。(三)転ジテ、家人婢僕ヨリ、其主君主人ヲ、恩義アルニ就キテ称スル語。主公。(四)又、転ジテ、商人ノ顧客ヲ敬ヒテ呼ビ。又、賤人ヨリ貴人ヲ尊ビテ呼ブ語。或ハ、其代名詞ノ如クモ用イル。顧主。花主。626頁
死損	死ントシテ死ニ得ズニアル。65頁	死ナムトシテ、死ヌルコトヲ得ズ。無益ニ生キテアリ。458頁
気入	人ノ気ニ投ジテ叶フコト。65頁	好ニ適ヘルコト。気合。所愛。250頁
砂漉	桶ニ砂ヲ貯濁リタル水ヲ漉スコト。78頁	桶ニ、浄キ砂ヲ貯ヘ、濁レル水ナドヲ注ギテ、下ニ漉シ出スコト。濁リハ、砂ニ留リテ清水トナル。531頁
筒咲	花ノ瓣ノ裂ケズシテ筒ノ如ク咲クモノ。80頁	花ノ瓣ノ、裂ケズシテ、筒ノ如ク裂クモノ。669頁
素腹	子ヲ孕マヌ婦人ノ称。82頁	婦人ノ子ヲ孕マヌヲ称セル語。533頁
面扶持	家族ノ人数ニ因テ与フル扶持米。100頁	家族ノ人頭ノ数ニ因テ与フル扶持米。口米。680頁
頂垂	憂ヘナドアルトキニ低回。101頁	頂ヲ前ニシテ頭ヲ垂ル。ウツムク。(憂ヘナドアルトキニ低回。)112頁
風見草	柳異名。101頁	柳ノ異名。186頁

以上あげた用例から見ると、著者はおもに明治二十四年(1891年)に出版され、大槻文彦が編纂した『言海』を参照しているようである。要するに、たんに羅普が日本語を学ぶ時の覚え書き程度のものが梁啓超等の勧めによって「和文漢読法」として出版された。また、この本は当時日本に滞在した中国人が買い入れただけでなく、中国国内でも販売されたようである。『清議報』64号広告欄で、「本書は本新聞社から販売する。定価二毫。割引なし。他所郵便料金別。上海委託販売店：抛球場掃葉山房書房」とされている²⁵⁾。この本が当時流行したのは、「漢読法」という言い方が当時日本に在住していた中国人、特に留学生の功を急ぐ心理と一致したからである。しかし、こうした粗製濫造の日本語入門書は、まったく速成の効力のないことも明らかである。

当時の日本留学生の一人、周作人(魯迅の実弟)は、この一時流行した「和文漢読法」について出版後30年あまりを経ても覚えていた。彼は「和文漢読法」と同じタイトルの文章(1935年6月)を書いている。その中で、彼は次のように記している。「梁任公(梁啓超 引用者)がいつ『和文漢読法』を著したのか覚えていないが、およそ庚子(1900年)前後であったであろう。それからすでに三十年あまりを経ているが、その影響は極めて大きかった²⁶⁾。ところが、「和文漢読法」はずっと流行していたわけではない。周作人が「和文漢読法」という文章を書いた時には、「和文漢読法」はすでに人の目に触れることはなかった。彼は次のように述べている。「三十年前、私は『和文漢読法』を見たことがあるが、いま手元にこの本を持っていないため、詳しく紹介できない」と²⁷⁾。周作人が述べた「その影響は極めて大きかった」という点は、悪影響をさしている。彼は「早くから『和文漢読法』を買えず、今それを知っている人も少ないが、彼ら(梁啓超等 引用者)の影響は今もなお残っている。恐らく、数十カ条の規則を

しっかり記憶して、数週間のうちに日本語をマスターしたい人も多いに違いない。私は、これは不可能であると言明する」と述べている²⁸⁾。

実は、「和文漢読法」が梁啓超の著作であるかどうか、あるいは梁啓超が述べたように速成の効力があるかどうかは重要な問題ではない。重要なことは、なぜ梁啓超が日本語を容易としたのかという点である。このことは彼の日本文化に対する認識を示している。彼は中国と日本の関係に対して論述する際、しばしば「同文同種同洲」という言葉を用いている。その中の「同文」は中国を中心としている。つまり、彼は文字も、文化も、日本はただ中国の付属品であると考えていた。彼は日本文化をこのように考えていたため、「和文漢読法」を論述だけでなく、他の日本文化に関する文章でも、つねに日本語の中には6、7割漢字があると強調している。来日後も来日前と同様に、彼は依然として日本語を学ぶのは、「聡明である人はわずかに一句で、愚かな人でも、わずか二ヶ月でみな興味津々日本書を読めるようになる」と考えていた²⁹⁾。

たしかに、歴史上中国は日本に極めて大きな影響を与え、漢字も中国から日本に伝わった³⁰⁾。このことを、日本人は否認するわけではない。たとえば、実藤恵秀は次のように述べている。「いうまでもなく、漢字は日本が中国からまなんだものである。明治いぜんにおいては、『やまとことば』に漢字をあてたものすなわちあて字だけが特殊であって、それは中国人には通用しなかったけれども、そのほかの用法は、両国ほとんどひとしかった。というのは、明治いぜんにおいては、日本がすべて中国にならったからである。文字にしても、日本では中国の一点一画をまなんだ。中国でのかきかたが一画ふえれば日本でも一画ふやす、一画へれば日本でも一画へらす、というありさま。成語もすべて中国のとおりを黙守してきた」³¹⁾。しかし、これは日本語が中国語と同じであり、日本文化が中国文化の複写であるからではない。梁啓超が来日前に著した「論訳書」で、「黄君公度（黄遵憲）は、日本語は学ばずに通曉でき、もし記憶力が優れていれば、半年で通曉できない人はいないと語っている」と述べているのは、黄遵憲の日本語に対する考え方を歪曲している。黄遵憲は日本語について、1879年に書きあげた『日本雑事詩』で、次のように述べている。「市井の平民は、方言をつかうものが十人に九人、漢音をつかうものは、十人に一人である。日本全国の音は、ただ北海道がちがうだけで、その他はおなじであるが、しかし知識階級の文章は、ことばがながく、助動詞が多くて、平民とは、たいへんちがっている。そんなわけで、日本語に通じようとするのは、容易ではない。我が国と字はおなじでも発音がちがい、語はおなじでも読みがちがい、字はおなじでも意味がちがう。そんなわけで、日本文を訳そうとしても、なかなかむつかしい」³²⁾。黄遵憲は『日本雑事詩』の中で、たとえば「仮名」、「イロ八四十七字」、「漢音異音支那音」、「日本文と漢文」などで、日本文字に言及し、しかも詳しく解釈を加えている。また、『日本国誌』の「學術誌」でも日本の文字の特徴を詳しく説明している。彼が日本語を独立の文字として研究したことは明らかである。したがって、彼が「日本語を学ばずに通曉でき、もし記憶力が優れていれば、半年で通曉できな

い人はいない」というような言葉を発した可能性は極めて低い。これに対して梁啓超は「『日本国誌』後序」を書いているが、その文章は通り一遍の説明をしたものにすぎない。日本語に対する梁啓超の考えから見ると、彼がほんとうに『日本国誌』を真剣に読んだことがあるかということについては疑問をもたざるをえない。

梁啓超は日本の文字を中国の文字の付属品とただけでなく、日本文化をそう考えていた。「東籍月旦」の中で、梁啓超は桑原隲蔵の『中等東洋史』、児島献吉郎の『東洋史綱』、市村瓊次郎の『東洋史要』などに言及している。彼はそれらの著作を比類なき優れたところがあると評価したが、「日本人が言う東洋は、西洋に対しては相対的なものであり、アジアを指している。しかし東洋の主人は唯一中国である。そえゆえ、『東洋』という言葉を使い著した著作は、おおむね八、九割中国の歴史を記載したものである。(中略 引用者)諸書の名目は東洋史であるが、実は中国史である」と考えていた³³⁾。要するに、梁啓超は日本は独立の文明を有するわけではなく、ただ中国の文明を受け継ぐものであると考えていた。日中文化の関係について、徳富猪一郎は次のように指摘している。「日本が支那より受けたる感化は、実に非常である。其の影響は実に莫大である。其の債務は到底計上し難き程度である。我等が之を認識したりとて、決して日本の恥辱ではない。我等は寧ろ之を認識して、却て日本の偉大なるを自証する愉快とする。即ち日本は其の土地の大人口の衆文化の高、我に幾倍し幾十倍する支那に隣し、然も遂ひに支那の凡有る文化を利用して、却て之を日本化し去った。日本は支那の資本を利用したが、決して支那の出店とはならなかつた。日本は飽く迄も日本である。其の受けたる感化は、却て日本をして、日本たらしめたるのみであつた。日本の独自一己の立場から見れば、支那の文化は、畢竟日本文化の肥料たるに過ぎなかつた。日本は支那文化を採用したが、それは日本文化を蕃植繁茂せしむる肥料であつた」³⁴⁾。徳富猪一郎は日清戦争と日露戦争後でこうした言葉を語っている。こうした言葉はプライドの気持ちが多少現れているが、日中の文化関係の実情を示したのものである。梁啓超が日本文化についてこのように考えたのは、中国人に根強い「中華中心観」がその深層部にあったと思われる。戊戌変法前に、梁啓超はいわゆる「華夷観」に批判を加えているが、日本文化を評論する際には、こうした「華夷観」が無意識のうちに露呈している。それは梁啓超個人だけではなく、日本文化に対する当時の中国人共通の考えを示したものであった。このことも中国人が深く日本を理解できない要因のひとつであった。

こうした考えについて、1930年代に、周作人は批判を加えている。彼は次のように述べる。「日本は古代において中国に倣い、現代において西洋に倣っているため、中国人はみな日本文化を蔑視し、触れる必要がないと考えている。たしかに日本は昔中国に倣い、現代西洋に倣ったのである。ところが、日本は外来文化を摂取し融合したのち、自国のものでした。ローマ文明がギリシャから形成したように、独自の風格を持ってきた。そのため、言うまでもなく、日本は独自の文明を持ったのである」³⁵⁾。さらに彼は「文学史上から見ると、日本は奈良時代から徳川時代にかけて千二百年余りの間に中国の影響を受け、その影響が至るところに残ってい

る。明治維新後には、中国の最近の新文学と同様に、西洋の影響を受けた。日本と中国を比べると、ほぼ同時に西洋に倣い始めた。しかし、今回日本は先進となり、中国はずっと後を追いかけて、時には意識的あるいは無意識的に日本に倣った。これは我々にとって、よい対照を与え、反省を促す」ともしている³⁶⁾。日本文化に対する周作人の評価は梁啓超よりも客観的であり、意味深いものであったと考える。

3 新語彙と新文体

前述したように、近代中国人の観念の激変は新語彙を吸収したことを背景としている。梁啓超は日本の新語彙を積極的に吸収した人物の一人である³⁷⁾。梁啓超がこれらの語彙を吸収し利用した際に、心中は頗る複雑であった。言うまでもなく、梁啓超が吸収した日本語の新語彙は「和文漢読法」に納められた語彙（一部除く）ではなく、当時中国には存在していなかった思想や事物に関する西洋書籍を訳した日本人の語彙である。1870年代に、たとえば丁韞良(Martin William Alexander Parsons)、理雅各(James Legge)等の西洋宣教師はすでに多くの新語彙を訳出していた³⁸⁾。その後、嚴復は『天演論』(T.H.Huxley『進化と倫理』)や『原富』(A.Smith『国富論』)を訳した。しかし、西洋の学術の進歩ははやく、中国人の翻訳はそれについて行けなかった。また、嚴復の訳語は深奥でなかなか理解できないため、のちに中国人の訳語は次第に日本人の訳語に取って代わられた。こうした状況下において、梁啓超は中国人の訳語を作り出した一方で、政治宣伝のために日本の訳語を借りざるを得なかった。こうした心情が、彼の多くの文章から分かる。

1899年12月の「夏威夷遊記」で、梁啓超は旅行の途中で同志と互いに詩を作り、唱和した光景に言及している。その中で、彼は特に鄭西郷の詩を記している。「鄭西郷は自ら平素一首の詩を作らなかつたと語った。彼の近作の一首は、『太息神州不陸浮、浪従星海狎盟鷗。共和風月推君主、代表琴樽唱自由。物我平權皆偶国、天人团体一孤舟。此身帰納知何処、出世無機与化遊』とある。私はこれを読んで激賞した。詩は日本が西洋書籍を翻訳した語彙、例えば『共和』、『代表』、『自由』、『平權』、『团体』、『帰納』、『無機』などを使った。私は近ごろ日本語彙を文章に入れることを好んでおり、読む人は新奇であると感心している。(鄭)西郷はさらに日本語彙を詩に入れて、渾然一体となる」³⁹⁾。しかし、梁啓超はこれらの新語彙を使用する際に、往々にして自注をほどこし、あるいは特に説明を加え、意識的に日本人の訳した語彙と中国人の訳した語彙を区分した。次に例をあげる。

日本自維新三十年来、広求智識於寰宇。其所著有用之書、不下数千種、而尤詳於政治学、資生学（即理財学、日本謂之経済学）、智学（日本謂之哲学）、群学（日本謂之社会学）等。（「論学日本文之益」、『文集』第三集、1373頁）

殖民之政（日本人称属地为殖民地、蓋人滿則徙之他地以殖之也）、行之數百年矣。（「論中國之將強」、「文集」第一集、90頁）

彼以為剖辨真理、当有所凭借也、於是創論理学（即侯官嚴氏訳為名学者）以範之、此其持論之精確、所以超軼前哲也。亞氏又名哲学与科学（中國所謂格致学之類）之別、亦其識之加人一等也。（「論希臘古代學術」、「文集」第一集、291頁）

英語 Logic、日本訳之為論理学、中國旧訳辯学、侯官嚴氏以其近戰國堅白異同之言、訳為名学。然此学実与戰國詭辯家言不同、故從日本訳。（「近世文明初祖二大家之学説」、「文集」第一集、392頁）

於是乎樂利主義（Utilitarianism）遂為近世歐美開一新天地（此派之学説、日本或訳為快樂派、或功利派、或利用派。西文原意則利益之義也、吾今隱括本派の梗概、定為今名）。（「樂利主義泰斗辺沁之学説」、「文集」第一集、412頁）

而此進化的運動、不可不犧牲個人以利社会（即人群）。（「進化論革命者頡德之学説」、「文集」第一集、423頁）

三為調和經濟革命（因貧富不均所起之革命、日本人訳為經濟革命）。（『清議報』一百冊祝辭並論報館之責任及本館之經歷」、「文集」第二集、757頁）

世界之貨幣、尽吸集於美国、紐約、芝加哥諸大市、遂為全地球金融（謂金銀行情也、日本人訳此兩字、今未有以易之）之中心点。（「論民族競争之大勢」、「文集」第二集、794頁）

世界之政体有三種、一曰君主專制政体、二曰君主立憲政体、三曰民主立憲政体（三種政体、旧訳謂君主、民主、君民共主。名義不合、故更定今名）。（「立憲法議」、「文集」第二集、920頁）

なぜ梁啓超が同じ概念を論述する時、往々にして中国語の語彙と日本語の語彙を一緒に使っているのか。彼自身の説明によれば、ほぼ二つの目的がある。第一は、ある中訳の語彙は西洋の原書の語彙の意味と食い違っている。たとえば、彼は「明代の李之藻は、Logic という言葉を『名理』と訳した。近ごろ侯官嚴氏（嚴復 引用者）は『名学』と訳した。実は、これは昔の『名家』の言葉である。この二種の訳語は、原書の本来の意味を正確に伝えていないようである。それで今、日本人の訳語に従って、『論理学』とする」としている⁴⁰⁾。第二は、「将来我が国の学界は、必ず日本の学界と密接な関係を持つ。それゆえ、むしろできるだけ日本の語彙を多く取り入れ、将来日中両国の訳本にずれが生じることを避ける」⁴¹⁾。にもかかわらず、彼は日本新語彙を取り入れる際に、よく考慮していた。たとえば、「積革」で、彼は「革命」という言葉について、次のように説明している。『革』なる者は、英語の Reform と Revolution の二義を有す。Reform なるものはその固有する所に困り、之を損益して、以て善に遷す。英国国会 1832 年の Revolution 是れなり。日本人は之を訳して改革といひ、革新といふ。Revolution なる者は輪を転ずるが如く然り。根柢の処より之を掀翻して、別に一新世界を造る。法国 1789

年の Revolution 是れなり。日本人は之を訳して革命といふ。革命の二字は確訳にあらざるなり。『革命』の名詞、始めて中国に見はるるもの、其の『易』に在りては、曰く『湯武革命、天に順ひ人に応ず』と。其の『書』に在りては、曰く「殷の受命を革む」と。皆な王朝の姓を易ふるを指して言ふ。是れ以て Revo の意に当つるにあらず⁴²⁾。これにより、梁啓超は日本人の作った語彙に抵抗したかったことが分かる。梁啓超は論証を通じて、Revolution を「変革」と訳すべきであると考えていたが、結局やはり「革命」という言葉が勝っており、しかも梁啓超が最も常用した語彙となった。「革命」という言葉だけでなく、梁啓超が斟酌したほとんどすべての語彙は、日本の新語彙に取って代わられた。つまり、梁啓超は日本新語彙の侵入に抵抗しようとしたが、なす術がなかった。こうした情勢が 1920 年代まで続き、次々と現れる日本の新語彙は中国に輸出された。日本人が訳した新語彙は、梁啓超の創作の源の一つとなったことが明らかである。その後、梁啓超が提唱した「詩界革命」、「文学革命」、「史学革命」では、積極的に新語彙を使うことがその基準の一つとなった。

新しい語彙を使うことは、文体の変化をもたらした。人々は梁啓超の文章を「新民体」あるいは「新文体」と称した。梁啓超の新文体形成の契機は日本在住中とするのが定説である。彼の文章は、日本の新語彙を取り入れただけでなく、日本文の文脈を取り入れた。これが彼の文章が世を風靡したおもな原因の一つである。来日前、彼の文章には、伝統的な四文字句がよく使われていた。これは彼の名声を博した「変法通議」が現れている。例をあげよう。

官制不善、習非所用、用非所習、委權胥吏、百弊蝟起。一官数人、一人数官、牽制推諉、一事不挙。保獎蒙混、鬻爵充塞、朝為市儈、夕登顯秩、宦途壅滞、候補窘悴、非鑽營奔競、不能療飢、俸廉微薄、供億繁浩、非貪汚惡鄙、無以自給、限年繩割、雖有奇才、不能特達。
（「変法通議・論不变法之害」、「文集」第一集、19 頁）

こうした文字はすぐれていたが、多くの人々には理解されなかった。来日後、彼の文章のスタイルは明らかに変化する。次に例を挙げよう。

凡一国之能立於世界、必有其国民独具之特質、上自道德法律、下至風俗習慣文学美術、皆有一種独立之精神、祖父伝之、子孫継之、然後群乃集国乃成、斯実民族主義之根柢源泉也。我同胞能数千年立国於亞洲大陸、必其所具特質有宏大高尚厘然異於群族者、吾人当保存之而勿失墜也。（「新民説・积新民之義」、「文集」第一集、550 頁）

明治期日本の文化土壌が梁啓超をはぐくみ生長させたことは明らかである。彼はさまざまな思想家の影響を受けたとはいえ、文体だけから言えば、徳富蘇峰は彼に最も大きな影響を与えた人であった。「夏威夷遊記」で、彼は徳富蘇峰について次のように述べている。「本を読んで

退屈しのぎをし、徳富蘇峰著の『将来之日本』及び『国民叢書』数種を読む。徳富氏は日本三大新聞主筆の一人である。彼の文章の勢いは雄壮で、意味深長であり、西洋における思想を日本語の文章に入れ、真に日本の文化界のため新生面を開いた。私は甚だこれを愛している。いつの日か中国において文化界の革命があれば、これを出発点としなければならぬ⁴³⁾。しかし、梁啓超は徳富蘇峰を推賞したが、「夏威夷遊記」と「自由書」を除いて、他の多くの文章には徳富蘇峰の名前を見つけ難い。にもかかわらず、馮自由は文化の面から梁啓超が徳富蘇峰とは深い関係にあったと考えている。彼は次のように指摘している。「人々は、清末における我が国の文学の革新を、梁任公（梁啓超 引用者）の創設した『清議報』と『新民叢報』の賜物とした。しかるに、任公の文字は大部分蘇峰の文章が役に立った。『清議報』と『新民叢報』に掲載された梁著の『飲氷室自由書』と当時の国民新聞の論文および民友社国民小叢書を照合してみると、梁の文章のテーマは蘇峰から取材しただけでなく、その書き方も九割方蘇峰に倣っている。これは蘇峰文学が間接的に我が国の文学革新に巨大な影響を与え、また『新民叢報』が初期においてたいへん受けがよかったことも原因の一つである⁴⁴⁾。馮自由は詳しく照合したと述べているが、一例だけあげている。「飲氷室自由書」の中の「煙土披里純(Inspiration)」は実に徳富蘇峰が1888年5月『国民之友』第22号に掲載した「インスピレーション」の訳文であると指摘している。石川禎浩は「梁啓超と文明の視座」で、六つの例をあげている⁴⁵⁾。これは馮自由の述べていることが虚言ではないことを証明している。

梁啓超がこうしたことを行った理由について、馮自由は「梁啓超は日本語に通曉しているだけでなく、英語にも精通していると読者に考えさせ、自分の学問の該博をひけらかしている」と述べている⁴⁶⁾。たしかに、そうした可能性もあるが、日本文化に対する梁啓超の認識がその深層にある原因であろう。梁啓超は次のように考えていた。日本の文化はほぼ二つの部分に分けられる。一つは昔中国から吸収したもの、もう一つは近代西洋から摂取したもの、そして中国人にとって倣う価値がある部分は日本新語彙でも、新文体でも、新思想でも、すべて日本人が西洋に倣った部分だけである。彼は心底から、中国が日本ではなく西洋に倣うべきであると考えていた。彼は次のように述べている。「真に学問を求めることから言えば、日本ではなく、西洋に倣うのは肝心なことである⁴⁷⁾。今日、日本に倣うのは、たんに便宜上の措置であったと考えていたため⁴⁸⁾。徳富蘇峰の文章だけでなく、他の日本における思想家の思想を利用する際にも、梁啓超は一般的に出典をはっきり記さなかった。これは人々に対し、彼の新思想は直接西洋から得たのであるといううわべを作った。こうしたことは、梁啓超だけでなく、当時の中国における知識人の共通の心理であったといえよう。1931年に刊行された『中国新書月報』第1巻第2号に若虚は「評中国著訳界」と題して、次のように述べている。「東文 つまり日本文 は中国文と同文である。だから名詞等々はすぐに利用することができる。だから日本文を翻訳するのは西洋文を翻訳するよりもやさしいようだ。しかも中国人はもともと日本を軽視している。だから学術上でも日本を軽視している。そこでいっばんの投機的な訳者はみな日

本の文中から外国書の訳本をさがしだして、いいかげんに訳してしまって、広告と表紙には西洋の原書から訳だと大ぼらをふいている。ところで、日本訳かならずしもわるくないし、西洋からの訳かならずしもよくない。まちがいさえなければ、日本訳だってかまわないわけだ。（中略）いたるところ日本人の努力をぬすみとっていながら、ひとのしりうまにのって日本人の作品をけなしつけるとはまことにへんなはなしだ。新刊書をひらいてみると、十中八九は日本からきたしろものだ。これは新文化におけるたいへんな汚点ではあるまいか⁴⁹⁾。梁啓超は中国近代史上重要な人物の一人であるため、日本文化に対する彼の認識は、その時代における中国知識人の日本文化に対する認識の縮図であるといえる。

おわりに

1912年11月中旬、梁啓超は神戸から帰国した。11月16日、彼は天津に着き⁵⁰⁾、それから二度と日本には足を踏み入れなかった⁵¹⁾。帰国後、梁啓超は日本の思想と文化にほとんど論及していない。例外は、彼が『大乘起信論』考証』を執筆した時、日本における『宗粹』、『仏書研究』、『宗教界』、『哲学』、『仏教学』などに掲載された松本文三郎、望月信亨、村上専精等の論文を参照したことを明記し、かつ「日本学者の学問の広さと深さを賛嘆しなければならぬ」と評価したことである⁵²⁾。実は、日本に滞在していた時、梁啓超は日本思想界また学界とはほとんど交流がなかった。彼は後世の人に多くの著作を残したが、邦訳されたのは「清代學術概論」と「中国歴史研究法」だけである。1929年1月19日、梁啓超は北京で逝去した。しかし、日本学界にはまったく反響がなかった。日本学界が彼の学術成果を高く評価していなかったことがそのおもな原因であった。清末における中国思想運動を総括する際に、梁啓超は次のように述べている。「清末の西洋思想の運動についていえば、たいへん不幸なことがひとつある。西洋の留学生がほとんど全部この運動に参加しなかったことであり、運動の原動力およびその中堅が、西洋の言葉や文字に通じない人びとにあったことである。これが能力の限界となって、低俗、瑣碎、雑駁、浅薄、錯誤などのもろもろの弊害を、どれも免れることができなかつた。このために、運動は、二十年になんなんとしながら、けっきょく堅実な基礎をきずくことができず、おこったかと思えば、たちまち衰えて、社会に軽視されたのである。この点についていえば、昔の西洋留学生は、国家の期待を大いに裏切ったわけであった⁵³⁾。その中では、日本に言及していないが、彼の考え方は明らかである。すなわち政治制度でも、文化でも、中国が倣うべきである相手は西洋であり、日本ではない。

言うまでもなく、明治期の文化は梁啓超に影響をあたえた。しかし、彼の心の底に残っている「華夷観」は彼が深く日本文化を理解する障害となった。多くの場合、彼は功利主義の態度で明治期における文化に接し、それを西洋への単なるかけ橋と見なし、日本文化における特有の性質を看過した。梁啓超だけでなく、これは当時の中国人が最も犯しやすい誤りであり、し

かも最大の誤りであったと考えられる。

<注>

- 1) 「夏威夷遊記」、『飲水室文集』第三集雲南教育出版社、2001年、1825頁。以下「文集」と略称。
- 2) 「論学日本語之益」、『文集』第三集 1372頁。
- 3) 「三十自述」、『文集』第四集 2224頁。
- 4) 小野和子訳『清代學術概論』平凡社、昭和49年、272頁。
- 5) 増田渉『中国文学史研究』166頁から。
- 6) 村尾進「万木森々」『時務報』時期の梁啓超とその周辺』、『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999年、67頁。
- 7) 末岡宏「梁啓超と日本の中国哲学研究」、『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』168頁。
- 8) 実藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版、1981年、338頁。
- 9) 李国俊『梁啓超著作繫年』復旦大学出版社、1986年。
- 10) 坂出祥伸「梁啓超著述編年初稿(一)」、『関西大学文学論集』第27巻第4号(昭和53年3月) 29頁。
- 11) 『清議報』64号。
- 12) 山田敬三「『新中国未来記』をめぐる 梁啓超における革命と変革の論理」、『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』347-348頁。
- 13) 「楊維新与丁在君書」、『丁文江、趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、1983年、169頁。以下「長編」と略称。
- 14) 「論学日本文之益」、『文集』第三集 1372頁。
- 15) 『新民叢報』第15号1902年9月2日「問答欄」。
- 16) 丙申九月十二日「与(夏)穂卿仁兄書」、『長編』57頁。
- 17) 馮自由「未正式入党前之王寵惠」、『革命逸史』初集、台湾商務印書館、民国54年10月、149頁。
- 18) 筆者は京都大学所蔵鈴木豹軒手沢本を依拠する。
- 19) 羅普、字は孝高、広東省順徳県の人、万木草堂後期康有為の弟子。戊戌変法が失敗した後、日本に留学し、東京高等専門学校(後の早稲田大学)留學生の第1号という。陳漢才『康門弟子述略』広東高等教育出版社、1991年、138頁。
- 20) 羅孝高「任公(梁啓超)軼事」、『長編』175頁。
- 21) 王照「任公先生大事記」、『長編』158頁。
- 22) 「三十自述」、『文集』第四集 2224頁。
- 23) 馮自由は「興中会時期の革命同志」で、「(羅普)は日本人柴四郎『佳人之奇遇』を翻訳し、『清議報』に載せた」と記している(『革命逸史』(第三集)40頁)。また彼は「開国前海内外革命書報一覧」で、羅普が『佳人之奇遇』の訳者であると記している(『革命逸史』(第三集)151頁)。
- 24) 狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察」、『東亜』2002年1月号、1頁。
- 25) 『清議報』64号。
- 26) 周作人「和文漢読法」、『苦竹雜記』河北教育出版社、2003年、180頁。
- 27) 同上論文、『苦竹雜記』181頁。
- 28) 同上論文、『苦竹雜記』182頁。
- 29) 「東籍月旦」(1902年)、『文集』第三集 1375頁。
- 30) 梁啓超は次に述べている。「日本はもともと文字がなく、すべて我が国から受け取った。その仮名でも、漢字のへんとつくりである」(『国語原解』、『文集』第一集 513頁)。
- 31) 実藤恵秀『中国人日本留学史』333頁。
- 32) 実藤恵秀、豊田穰訳『日本雜事詩』平凡社、昭和43年、108-109頁。
- 33) 「東籍月旦」、『文集』第三集 1383頁。
- 34) 徳富猪一郎「国史上より見たる支那」、『昭和国民読本』東京日日新聞社・大阪毎日新聞社、昭和14年2月、141-142頁。
- 35) 周作人「關於日本語」、『苦竹雜記』169頁。
- 36) 同上。
- 37) 幕末と明治の初期において、多くの場合、日本人は積極的に中国の洋学書、例えば『英華字典』、『万国公法』、『地球説略』、『聯邦誌略』の語彙を利用していた。のちに、こうした情勢は変わり、日本人は多くの西洋學術に関する語彙を訳し、中国に伝えた。しかし、これは別の課題である。

梁啓超の日本観（盧）

- 38) 例えば、teacher 教師、civilized 教化、created 創造、life 生命、breathe 呼吸、motions 運動、trade 通商、universe 宇宙などである。
- 39) 「夏威夷遊記」、『文集』第三集 1827 頁。
- 40) 「子墨子学説」、『文集』第一集 329 頁。名家、中国春秋戦国時代の諸子百家の一。名（言葉）と実（実体）との関係を明らかにしようとする論理学派。公孫竜、恵施はその代表者。
- 41) 同上。
- 42) 「釈革」、『文集』第四集 2242 頁。訳文は実藤恵秀『中国人日本留学史』346 頁から。
- 43) 「夏威夷遊記」、『文集』第三集 1828 頁。
- 44) 馮自由「日人徳富蘇峰与梁啓超」、『革命逸史』（第四集）270 頁。
- 45) 石川禎浩「梁啓超と文明の視座」、『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』126 頁。
- 46) 馮自由「日人徳富蘇峰与梁啓超」、『革命逸史』（第四集）270 頁。
- 47) 「東籍月旦」、『文集』第三集、1374 頁。
- 48) 同上。
- 49) 実藤恵秀『中国人日本留学史』344 - 345 頁を参照。
- 50) 「長編」650 頁。
- 51) 帰国後、梁啓超は数回、日本へ赴く計画があったが、結局行けなくなった（民国五年一月二十一日「致蔡松坡第四書」、『長編』751 頁。民国十二年一月二十九日「与宝贝思順書」、『長編』983 頁）。
- 52) 「『大乘起信論』考証序」、『文集』第五集 3029 頁。
- 53) 小野和子訳『清代學術概論』309 頁。

主指導教員（井村哲郎教授）、副指導教員（国谷知史教授・芳井研一教授）